荒鷲

4

福岡大学書道部機関誌

巻頭言

人類は成長することを欲するものだ。人類が成長する為には、個人は生きている間にいろ〳〵のことをしておくことが必要だ。

人間は何かしに生まれたものだ。何にもしない為に生まれたのではない。

それなら何をしたらいいか。

それは自己を完全に生かすように努力することと、隣人の為につくすことである。

人間はまだ正しく生きる事が中々出来ない境遇にいる。それを段々よくして人間全体が人間らしく生きられるように骨折ることを我等は命じられているのだ。

我等個人の力は小さい、しかし、小さいなりに何かの形で我等は人類の成長を助けなければならない。だから、我等は真面目に働くことが必要であり、勉強することが必要であり　昨日の自分より今日の自分、今日の自分より明日の自分と進歩してゆくことが必要なのである。決して一所に停滞して我等は満足するものではない。自分の天職と思う方で、日々進歩してゆかなければならない。

進歩が止まった時、その人は次の時代に席を譲らなければならない。新しきものは必ずしもいいものとは限らないが、しかし新しきものを少しもふくまないものは、人類からすてられる。たえず進歩することが必要なのである。

武者小路実篤著「人生論より」

目次

巻頭言 …… (1)

西日本高等学校揮毫大会委員長の役目を終えて …… 経済学部三年 渡辺正道 (4)

四年間をふりかえって …… 法学部四年 田中洋典 (6)

すはらしき？部員 …… 商学部四年 田鍋義邦 (7)

七隈祭の反省 …… 法学部一年 末宗堅太郎 (9)

書道 …… 法学部一年 平井晴彦 (10)

三年間の書道部生活を省みて …… 商学部四年 武田紘一 (11)

研究会展を振返って …… 法学部二年 久保和代 (12)

書の倫理 …… 法学部四年 佐野和夫 (14)

私の一年時代……工学部四年　堀川益二郎　(15)
無題……工学部一年　諫山貞雄　(18)
七慰祭の反省……商学部一年　谷口　薫　(20)
入社あと四ヶ月を前に……商学部四年　奥田勝久　(21)
三人展に関して……商学部四年　石橋健吾　(22)
夏季合宿を省みて……法学部一年　太田勝磨　(23)
近頃考える事……法学部一年　高橋幸代　(25)
書道部……先輩　原　通幸（博多女高）　(26)
雑談（二）……法学部一年　井上忠敏　(28)
編集後記……(29)

西日本高等学校揮毫大会委員長の役目を終えて

幹事
経済学部三年
渡辺正道

最初の参加校が来校して来た時のうれしさ、今までの苦労がどこかへ消え去ってしまった様な気持になり　大会本部の中をうろうろしていたあの数日前の気持……。

今長い様で短かかったこの半年を振かえってみると　まず六月学校側への体育館交渉よりこの大会は出発した。田鍋先輩に言われるまゝに計画をたてて大会の準備にはいった訳であるが事はなかなか思う様に運ばなかった。後援会めぐり、審査員折衝問題と色々あるが後援会めぐりにしても今おもえば、良く取れたものと思う。（又これは当然かもしれないが）

真夏の太陽の照りつける歩道を各後援団体に挨拶してよろしくお願いしますしの言葉をもって廻ったあの時、昨年田鍋先輩につれられて行った時の先輩の堂々とした態度に比らべて自分の何と小さく思えた事か、しかしそれでも自分なりの勇気をもって廻ったのでどうにか取れたし、最後まで気をもたせた県教育委員会もOKとなった。そうこうしている内に審査員交渉、これは先生の選定に苦しみましたがどうにかバラエティーに富んだすぐれた先生方に来ていただく事が出来て今思えば良かったなあと思われる。このたった二つの仕事をすませて跡を振り見れば、早くも夏季休暇も半分を過ぎ大塚君と二人でバイトしたいのもがまんして、彼が早く郷里に帰りたいと言うのも無理に止めても数日――と延ばさせて残し、彼の夏の休暇を少なくした事に対しては本当にすまなく思っております。

又自分自身も熊本の郷里に早く帰りたい気持にかられ本要項作成の段階に入りましたが田鍋先輩に一度熊本に帰ってから後にして下さいと懇願し、

無理やりに帰えしてもらった事など：　しかし帰ってみたった一週間の余暇だし、大会の事が気にかかり、何一つ手につかない状態でついに県展の合宿入り　合宿中に本要項の事を決めてしまい、本要項の準備を終えました。合宿の思い出は苦しかったけれども又楽しい思い出と化している。

県展作品作成も終り、ついに夏季休暇もあと数日、熊本に帰るにはひまなしの状態なので下宿にて一人大会の準備を進めて本要項のタイプもお願いし九月を迎えた。九月にはいって各学校への案内状を二百八十校程（西日本地区）に出して何通の返事が来るかをたのしみに出したものです。

その後　数日間下準備に毎日をすごしその間学校関係の使用願、後援団体の再確認、審査員への案内など、山ほどの仕事があるのを終えて　それと並行して学園祭の準備も進めなければならなかった。

この間、現役員の方々及び先輩の多大な援助をお受けして準備は着々と進んでまちにまった第一通の朝倉高校の参加申込みがあった。しかし、その後数日手紙はとだえどうしたらいいのか、自分の責任だろうかと心配しなければならなかった。それでも後日には数十校よりの参加申込みがあり、安心はしたものの、昨年度に比らべて少なかった。今おもえば当日が日曜日であるという好条件の反面、色々と高校側で行事があり、それに旺文社の模擬テストという事があった事も一因だろうかとも思われる。参加校も決まり、高校生が来校して最上のコンデションで奏ける条件を作る段階にはいり、特に今年度は鹿児島からという遠来からの参加もあって万全を期さなければと思って準備を進めました。十一月にはいり　一番大切な時期に七隈祭が行なわれ、この二つの行事を行う時にはこの自分の低い頭脳ではコントロールをみだすこともしばしばあり、そのつど先輩のより良き援助により正常にもどす事が出来たものと思っております。（特に堀川先輩宅に役員と泊まり込みで話し合ったあの一日は　本大会を迎える最終段階に於いてこの上ない良いアドバイスではなかったかを思っております。）

七隈祭も終り　部員一同一致団結して行う日がやって来ました。

いよいよ大会当日、朝からとても良い天気に恵まれ　我々のこの大会を祝福しているかの様に。入混乱するかと思われた受付もスムーズに行き、高校生がぞくぞくと来校するのを見ればやはりうれしさでいっぱいになりました。開会式もぎこちないなりながら終り、十一時十五分　江頭監修長の元に、あの雄大なスケールの中に於いて一斉に書き出した静と動のクライマックス、なんと輝かしい事か　静かな中に紙に書く時のタッチだけが静けさを破り、サラサラと音を立てるあの光景、あの音は書道をやるもののみにわかるような気がします。

そのような内容の中で、各分担の係の人々は、自信にみちた行動によって大会をより良く盛りあげてくれ、又大会中大きな手落もなく　ぎこちないながらもスムーズに進行させてくれた部員一同に感謝致します。

審査会にはいり、審査員のおくれというハンディーはありましたが、昨年度に比らべて時間的にもスムーズに出来、その結果大会内容が報道され特にNHKのニュースに報道された事は真にうれしい事でありましたと同時にこの大会もいよいよ大きくなり社会一般の注目をあつめる様になったものと強く確信しております。

最後に何もわからなかった私に舟首に立ち色々とアドバイスをして下さった安河内先輩並びに四年生の先輩、又同毎中にありながらこの西日本高等学校揮毫大会をより一層スムーズに進行させ成功させてくれた部員一同に心より感謝致します。

四年間をふりかえって

法学部四年　田中洋典

文筆も何もない私などが、機関誌に寄稿したところで何の意味もない。そこで後の人々に私の勝手な回想録でも書いて後輩の人々の前に表したい――そう思って書こうとする訳で全く唯何となく

書いて見るだけのことである。

私が福大の書道部に入部して四年間が、過ぎようとしている。入部当時一番おどろいた事は、汚ない部室、練習場であった事。高校時代と比較して余りにも設備不十分であった事である。いいかえれば、高校時代が、余りにも充実していたのかもしれない。しかし　書道部にも練習場として日本間道場が出来、入部当時には全くなかった法帖も、古典臨書するにあたって一通り不自由がない位に整い、部員数も増加の一途をたどりつつある。名実共に当書道部は発展途上にある。誠に喜ばしい。加えて一年生諸君の練習熱心さ、二、三年生の後輩に対する指導、全く部発展の為に全力を注いで呉れていることを思えば頭の下る思いだ。この様な後輩諸氏が続く限り部発展も続く事だろう。

☆☆☆☆

すばらしきこの部員

商学部四年　田鍋義邦

☆☆☆☆

私は最初から書道に対する確固たる信念を持って入部した者でもなく、ましてや半折以上の紙に字を書いた事もなかった。入部して二、三ヶ月たつや否や半折をやらされ、これが練習の中心となり　又その他に半折以上の紙にも取り紙り組んだ。しかし私は、冒頭に書いた様にチョットした好奇心でもって入部したもので、サークル活動を主眼とし、たゞ多くの人と接したい、そして私自身を振り返えって考えてみたかった。その為にも一年当時は部のあらゆる行事に参加したし又多くの人と出会った。そこにはもちろん書道部の同輩や先輩、そして福書連の人々である。私はこゝに書道部生活が続いた一つの原因がある。確かに我々四年生は波瀾に富んだ人間関係をもっていた。一人一人が両極端の癖を強く持っていたし、自己完結的な人物が多かった。これは私が述べたい事と別

問題だが、しかしそれだけ残った四年生は親密になって来た。

書道部に入って来る一年生をつかまえ　私は何度となく「君はどうして書道部に入って来たのか」と質問した事がある。十中八、九がただ字が旨くなりたいとか、何かサークル活動に入らなくてはと答えていた。そしてわずかの残りが高校から書道を続け大学に入ってもそれを延ばしていきたいと考える者である。これらわかるように福大書道部は特に素人が多く、確かに書道とは無関係の学部の者達ばかりである。それが四年たつと、当時考えもよらなかった方向に変化している。卒業後就職した後も書道を続けたいと考える者が多く、その中には書道専門の道に進む人もいる。たゞ四年間の練習のみならず将来までも関心をもつことは大変喜こばしいことである。

私の書道は同輩に比らべて旨い方の存在でなく、四年間というものは常にはがゆい思いの連続であった。これが又一つの書道部生活が続いた原因の一つであった。書道部員は字が旨くなる事、これはすばらしき部員と考える。私は書道部におりながら、常に字のことについて劣等感をもっていたし、反面よく練習もした。しかし少々上達して他人と比らべれば、、、とうとう四年間一度も満足感は得られなかった。私はこのはがゆさを何度味わされたものか。やはり字が旨いということはすばらしき部員である。

さてそれと同時にサークル活動に協力する者程すばらしき部員である。我々は芸大に進学している者でもないし、塾生でもない。我々はサークル活動として書道をやっている。このことをよく肝に命じてほしい。書道専門に生きようとしている先輩も、サークル活動には自分から進んで円陣を囲み努力した人達である。サークル活動に不熱心な者、又自分の考えに妄信した者は書道部から離れ、又離れざるをえなかった。彼らは私の知っているかぎり書道から又苦しの部員から縁遠い人となった。

書道に優れ同時にサークル活動に進んで解け合う人、これが書道部員の理想像である。またそれ

らに何って努力する者、それはすばらしき部員である。現在、書技向上の為週三日の練習はあるし年五回の合宿もある。高度に発達した書技活動は満足な状態ともいえよう。あとは大いに円陣を組んで遊ぶことである。同輩と　そして後輩と、また同時に先輩と。卒業すれば書道部が気になり同輩が気になる。我々は卒業しても励ましあいながら書道をやり、書道部を忘れられないものにすることが　我々の最も命題とするものではないか。過去には色々のつまずきはあったが現在の四年生は　今はすばらしき部員である。そう確信して思い出されコンパに出席しようと念じている。

七隈祭の反省

法学部一年　末宗　堅太郎

七隈祭の反省と題するからには、まず作品の飾りつけから始まるが、飾りつけには、早朝から多数の部員が出席していたが、多数出席しているにもかかわらず仕事がはかどらなかったのは　どうしてであったろうか。責任者を責めるには忍びないが、前もって、どんな工合に配置するかは考えていそうなものであったろうから。誰々には何々を、等前もって各個人個人に仕事を与えておいていたならば、朝早くから夕方薄暗く居残ってまで仕事をするという必要はなかったのではなかったろうか。さて展示場所については、教室も他のクラブに比べて多く使用する事が出来、書の道にふさわしく、静寂そのもので申し分はなかったのではあるが、肝心の一般客が少かったのはどうしてであったろうか。兎に見まわれたのは仕方なかったとしても、僕が考えるには、多少　他のクラブに比べP.Rが穏やかすぎたのではなかったろうか。この次からはもっと積極的に他のクラブに負けない様に部員一同ハッスルし、より多くの人達に我々の活躍の成果を見てもらおうではないか。次に展示についてであるが、毛筆の方は大体においてよかったと思うが、硬筆の方は、もう少し周りの作品との色彩や調和を考えて、もっと変化を持たせていたならば、さらに一段と作品が輝きを

惜しむ事であったろうに。誠に残念！また体育祭は七限中、最後を飾る行事でもあるのだから、我々書道部員一同 有終の美を飾る心構えで出席してほしかったものである。

書道

法学部一年 平井晴彦

私も書道部に入部してから半年以上たち、これからの自分の立場が、いかにあるべきかと、いう事が、わかって来た。幸い私は、福岡学生書道連盟の事務次長の席を与えられ、私の書道生活が、きまったものの様に感じられて来た。最初私が書道部に入って感じた事は、先輩の残された業績は偉大なものであり 感嘆するところである。しかし、先輩諸氏のなされた時は、今から五、六年も前の事で 現在の我々に又二、三年後の部員にも通用するかと思うと 疑わしいところもある。よい伝統はさらにみがきをかけてより一層よいものにしなければいけないが、さして重要でないと思われるものは、どしく改革をしていってもよいと思う。部の役員になったものは、先輩の仕事をそのまゝ受け継ぐのもよいが、かえって欠点となって出てくる事もある。これからの役員は、先輩の仕事を受け継ぎながらも独自の方法でやっていただきたいと思う。私は、書道部員であるからここに書道の練習法を紹介しよう。

一、臨書――手本をみて書く方法である。手本は、最初正面において見てから左へおく。最も手本の形が大きいものは、上におく。始めは、一点一画の細部を注意し、次に全体を注意して、なるべく一字を書く間は、途中で手本をみないで一気に書いた方が散漫にならない。

二、摹書――手本の上に紙を載せて書く方法。これは、どうしても形のとりにくい字などに行うと随分倍るところがある。しかしこれは 形や筆意に得るところがあって、筆力の養成には、臨書に劣り、又手本を自家薬籠中のものにするには、やはり臨書に劣る。しかし勉強には、あらゆる角度から改めて見る必要があり、摹書も大切な方法

の一ッである。

三、背臨――習っていた手本を伏せて書く方法で、見て書いた場合とどの位違うか、その理解を知る上で役立つ。自分の実力を養成する尺度として有効。

四、九宮法――手本の文字へ方眼の罫を引き同様の罫を引いた紙を下敷にして、手本のある罫と、こちらの罫とをはかりながら練習する方法。あまり用いると罫を頼りにし過ぎて弊害が生じます。

五、雙鈎法――手本の文字の輪郭を線でとり（籠字という）それを墨を入れて習う方法。練習方法は、以上の様にいろ〳〵あるが、私が連盟役員として他大学を訪問して感じた事は、書道は人間形成の一つの学問には違いないが、又一種の勝負事といえる。それは、昔の手本が一つの敵であり競争相手である。そして敵の通りにいった時は此方が勝ったのである。つまり昔の良いものと取り組んで相撲を取る様なもので強い人間を相手に勝負するのであるから、手がとん〳〵上っていく。勝負に勝とうとする点が苦心といえば苦心だが、しかしそれは、非常に張り合いがあって楽しみなものである。昔伊夫人という人は、筆陣の図というものを書いて、どういう風にすれば勝つか、負けるかを教えている。それによれば、計画なしに事をやれば、失敗し、心の方が筆より進んでいけば勝つといっている。皆さん練習は、計画的に幅広く練習し、次期書道会を背おう人間になりましょう。

三年間の書道部生活を省みて

商学部四年　武田紘一

西日本揮毫大会も無事に終えた十一月下旬、落葉散りし晩秋の候、追い出される日も間近で一人しみじみ愛着を感じるようになった書道部生活を回想し今後の成長への指標にでもなればと思いペンを取らせて頂きます……。

まず私が2年次で書道部入部の動機をのべると、当時私は他に入学当初からの自動車部に在籍していて、書道部にはいる意思はミジンもなくただ親

友である千川君と雑談中、「今から書道の練習やりん見に来んや！」と勧められ何気なく二号館横同学友会本部のバラック会議室に足を入れたのが幸か不幸か書道部とのそもそもの因縁の始まりである。そこには確か二年生以上の練習者七名で三人が上敷きを使用し、他の四人が古びたポンコツディスクに適当に部活動を満喫しながら一心不乱に筆を巧みに二なしておられた。私はただ感心して点と線に見とれていたが、そのうち隣人のお勧めもありオスオスと半紙に廟堂の「至道於先」と四字書いたのを思い出す。それ以後書道部に週一〜二回くらい来部し諸先生、先輩の御指導により多少なりとも興味が増しつつあったが　初めは身勝手ながら書道部に居残る決意は全然なく、自動車部を主体としていて書道部を退部させられても文句が言えない立場であった。つまり自動車部は四年間続ける考えであった。ですから二学年次は書道部、自動車部、週三回の夜間アルバイト等で様々な板バサミに遭遇して私自身私的な悩みを数多く体験したものであった。双方の部に長所、短所はあり良友、悪友もいて部活動もそれぞれの特色があり、一概に天秤にかけ物事の尺度を決定したわけではないが、書道部に落ちつかせて頂く結果となった次第である。

今になって考えてみて書道部に居残らせてもらった動機を強いて述べれば様々な板バサミと葛藤の中にも私の性格に適合した書道部の伝統的な何ものかがあり、また諸先輩・同輩諸氏の配慮に自己の意思が傾いた結果だと思う。次に書道部生活において私なりに習得したことを述べさせて頂くと……。　部内生活自体、各個人、十人十色の人知れぬ悩み悲しみ苦しみは誰もが抱いていると思うが、成長を目的とした苦痛は最終的には楽と化し、楽しい想い出のほうが深く心に残るのである。恐らく少くとも私以上に御苦労を体験されている諸先生、先輩、同輩、後輩の方々も苦労、苦闘とは反比例な満足感や安息を発見し精神面での充実を味わえるのではあるまいか……。このことは大局的には各個人の仕事や任務、また身近には書道関係活動に金と暇を費やし、大けさだが青春を犠

性（個人の信念や価値感の相異により適確でない言葉だが……）にしてまでも全身全霊を打ち込みながら情熱と地道な努力により、自己と戦い、常に能力を最大限に錬磨　精進している姿の理窟を越えた美しさも書道を通じて改めて体験理解出来たのである。また部員相互間のヒューマンリレーション（人間関係）における競争意識は大小の差はあれ存在すると思うが（私も以前は嫌悪感さえ持っていたが……）お互に良い面で競争しつつ共に進歩向上することが理想であるということも部活動で体験したことで、このことは自己を他人と感情のみで比較するのでなくて、自分の過去と現在また未来像を比較、検討し現在の立場を最も有意義に創意工夫し努力すれば、感情的な嫌悪感は消滅し精神的に幸福な人生が送れると思う。「苦労を積んだ人はどこか違う」と言われる所以である。以上のことは口で言うのも大切だが実践行動に移すことがより一層肝心で、有言実行も（佐藤総理のオハコでは困る）我々身近に部員相互の義務、使命たるべきものであらねばならないと思う。

私も部内生活において講義（適度にサボッたが）男の一生を左右する就職、家庭との関係、その他で我がままになり自己中心主義に陥った感は免かれないが……目標の半分も到達出来たとは言い難いが……とにかく現在まで大禍なく来れたのも諸先生、先輩、部員の方々の御理解と寛容さに帰するところが大きく、関係者に深い感謝の念と心からの敬意を表するものであります……。書道部生活が間接的に教えてくれた教訓と身をもって体験した精神面ならびに肉体面での経験は今後の私の人生航路に大きなウェイトを占めると確信している。（個人的な教訓じみたことに傾き偉らそうなことを言える柄ではありませんが……）。

最後に淋しい追出された当たり今後の部員の方々の精進と書道部の御発展を心よりお祈り致します……。

昭和四十年　霜月下旬記

研究会展を振返って

法学部2年　久保和代

十月二十二日、土曜日。今日は、福岡ペン習字研究会展の初日である。今日と明日の二日間を我々が汗を流して創った作品の展示を終るのは何ともったいない気もする。しかし、たった二日間でも展示するだけ練習にはげみが出るから不思議なものである。

授業が終って、この展示場へ姿を現わした時にはきれいに飾り着けてあって、お客様もいらしていた。しかし何となく色彩的に乏しく、花がやたらと生けてあるのが目についた。それに、仕事をしている人も中に坐っている人も福大生ばかりで、その上、作品までも他校のものが賛助的な形で、何だか部門店を開いている様な錯覚をおこした。又、野村先生や雲峯堂の先生などがいらっしゃって、色々なアドバイスをして下さった。野村先生など一展一展の写真を写して下さったり又、雲峯堂の先生は　全体的構成の面からとか一展〳〵をていねいに見て下さった。その中で、「いかめしい作品ばかりでなく、幼稚な作品もあっていいんじゃないか」といわれた事だけ頭にこびりついて離れなかった。この様に、先生方や、お客様のアシも数多くお運び下され、成功のうちに終った。又、来年も今年以上にがんばって欲いものである。最後に毛筆の皆様、御協力大変有難度うございました。又来年もよろしくお願い致します。

書の倫理

法学部四年　佐野和夫

書道は芸術である。字は、点と線の集りであり、それに墨色を生かし創作して造り出したものが書道である。墨色の美しさ、線の生かし方、字の変化、字の風格、それらのものを造り出す。それを生かすも殺すも一本の筆に託されている。それは厳しさ、激しさ、あらゆる煩悩を打払い精神の統一をはかる。これあたかも厳粛な儀式の様なものである。何事をなすにしても忍耐、根気、努力が必要である。

私の一年時代

工学部四年　堀川　益二郎

福岡市西新町八一五宮原方……これは、私の下宿である。今から三年数ヶ月前、産声をあげてから二〇年間住みついた熊本の自宅以外のところでの生活が始まった。その当時、正確には昭和三十七年四月十日、四畳半の部屋は入学以前の参考書と高校の教科書数冊を除いて座り机、寝具、座ブトン一枚、衣類と入学通知書ぐらいのもので書道用具などは筆一本すらなかった。……

学校が始まると毎日キチンと朝は七時半には起きて学校へは九時頃は着いていた。しかし、入学時のころは学校の授業を受けても、一つも面白くなかった。そもそも福大に入学したことが不満でたまらないのであるから前更のことだ。学校に入学金を収める前に親父にあと一年浪人したいのだが恐る〳〵話したところ頭から否定されてしまった。何しろあと一年浪人したら弟と一緒に予備校に通うことになってしまったから親としても堪えられなかったのであろう。……

入学式に出席する為、確か熊本駅発七時五〇分の準急「有明」だったと記憶している。一人淋しく乗ったら偶然、清水といって、熊本高校時代三年の時同じクラスで、卒業後も予備校で一年間一緒だった友達に会った。「オー久し振りだな、今どうしている」の挨拶に始まって、実はこんなわけで、今日昼から入学式なので……ということで意気投合してしまった。彼は、私より一年早く西南大学に入学して、西新町で下宿していた。入学式の日は丁度西鉄がストで電車、バス全部動かず仕方なく、博多駅からタクシーをひろって、まず清水君の下宿に行き、それから私の下宿へ来て彼は　西南大学へ　私は、入学式へと行ったのである。

それからはたびたび彼の下宿にダチをこぼしに通ったものだ。入学してから二、三週間ぐらいはこんな学校なんかやめてしまおうと思っていた。そこで彼は、自分もそうだった。それで又翌年ど

こか大学を受け直そうと思い、入試用勉強と大学の勉強と　二また式で二ヶ月位一生懸命頑張ってみたそうである。何故それを止めたかというと、このまゝでは必らずどちら共行詰ってしまう、その余力をクラブ活動へと向けて大学生活をインジョイすることによって、人間を磨こうと考えたそうである。私が彼の下宿を訪れて、大学なんてこんなに面白くないところか、憧れて入学した大学なら何とか辛抱出来るか　もう落着いて、勉強するのは馬鹿〳〵しくて……とふてくされるので、「何かクラブ活動に入れと、それも文化部門系がよい」と勧めてくれた。私の方も書道なら少しは自信があったので書道部に入ることにしたのである。今考えると清水君か今日の私成さしめた本人であると感謝している。今では彼は、安田火災海上保険の東京本社に勤務している。クラブ活動も熱心であったか、勉強の方もなか〳〵やっていたし成績もよかった。

さて私にはこれと真反対の友達がいた。それは吉村、佐藤という友達である。吉村とは高校こそ違ったが熊本の私の家から歩いて七、八分ぐらいのところにある医者のあと継ぎ息子で、熊本の予備校時代よく一緒に勉強し遊んだ友達で（遊ぶことの方が多かったが）　まわりかうるさくて熊本に居ずらくなって福岡へ逃げて来たようなものだったが、そもそもの直接原因は、彼が予備校時代に恋思相愛の恋人が出来て、予備校といえば勉強さえしなければ、暇がありあまるので適当にやって図書館に行くといっては遊びに歩いていたことが親に知れてケンカして家出してしまった。それで友達のところに泊っていたら三日ばかりして親に連れ戻されたこともあった程で、福岡へ逃げて来たようなものである。佐藤というのは、高校時代一緒だったが二年の終り頃八回目の謹慎をくらって退学寸前になったので玉名高校へ転校していった。二年目に一緒になったのである。彼の故郷は宮崎の高千穂で、お医者さんの三男であった。彼も又吉村と同じくスラッとした色白の美男でプレーボーイのサンプルみたいなようなもので適当によろしくやっていたのである。

その二人が何の因果かしらないが偶然福岡市内の水城学園の予備校で一緒になったのである。吉村の方は、二ヶ月ばかり天神町に下宿していたが佐藤と一緒の寮に移ってきた。その寮が又西新町にあるのである。彼らは二人とも酒好きで、メッポウ強いのである。そこで私もよく飲みに誘われた。少い時でも二週間と間をおかなかった、その寮のすく近くに〝千成〟という居酒屋があった。そこが彼らの行きつけである。そこのオヤジが又酒好きで人がよく、一緒になって飲むことも〳〵あった。彼等二人はそこではよく焼酎を飲むので彼ら専用の焼酎がいつも特別に置いてあった。他の客で焼酎を飲む客は殆んどないそうである。値段が安く　早く酔うので彼らには味さえ少し我慢すればよかったのである。しかし私はどうしても焼酎だけは随分勧められたが飲む気にはなれず二級酒を飲んだ。勿論コップ酒で「おでん」がサカナである。そこのオヤジは気げんがよい時は、バーなどへも連れて行ってくれたものだ。その頃は　又金にも不自由していたので質屋にも通うことがあった。時には彼らとの飲み代の軍資金になったこともあった。

たしか十月の末頃だったろう、とう〳〵彼らは他の寮生に迷惑をかけるからといって寮長から二人とも追出されてしまった。そして西南大学の裏に仕方なく下宿へと変ってしまった。その後彼等は勉強机を買う金がなく　特製のリンゴ箱で来年の三月まで押し通したのである。

ある時は十一時頃三人で西新の「仔鹿」というバーに行った。いつだったかは正確には思い出せないが何しろ寒い夜だった、二時頃まで飲んでいざ帰ろうと外へ出てみると雪が十センチばかりいつのまにか積っている上を歩いて帰ったこともあった。

又ある時は　夜の三時頃飲み屋の帰りに彼ら二人と別れて一人で西新町の商店街を藤崎の方へ向ってふら〳〵歩いて帰っていると、防犯のあたりでパトロール中の警官に捕まり転務質問されてしまった。真夜中の三時といえば人通りも全然ないので早速「今頃何をしているか」である。「実は

友達の下宿に遊びに行って酒を飲んでいたら話がはずんで遅くなってしまった」に始まって故郷は熊本の出身で大学に行っていると言ったら急に親切になりとうとう下宿まで送ってくれたこともあった。

貧人生活がこんな状態では入学試験などあったものではない。二人とも国立の医学部志望であった。一月も終りが近づくと大分勉強するようにはったらしかったが、とうとう二人ともそろって希望の国立は、全部落ちてしまった。佐藤の方は、仕方なく東海大学の工学部へ入ったが、吉村の方は、どこも他は受けなかった。おまけに福岡での生活が最後に下宿していたところから親にバレてしまったのだからたまらない。次の年は熊本の自宅へ帰って予備校へも行かずにしょんぼり一年を送ったが、医学部はあきらめて大阪工大へ入った。考えてみると普通の人が大学四年送って卒業した後大学に行ったことになる。

私としても大学に入って急にそれまでの不満が発散したのであろうか、入学後の二、三ヶ月以後の一年間が、四年間の大学生活で一番荒れていたようであった。それでも飲みに行ってからはとんなに遅くなっても自分の下宿に帰らなかったことはこの四年間に一度もない。

二年になるとこういった良友、悪友が消えると工学部と書道部の友達が生まれてきた。そして三年になって私の友達関係と日常の生活は完全に書道と切離せないようになってきたのであった。この一年間は大変充実した一年間であった。

無題

工学部一年　諫山貞雄

こういう原稿というものを書くのは初めてですので、終始一貫せぬ文章になりはせぬかと心配しながら筆を取りました。僕達一年生が　四月に書道部に入部して、まもなく先輩部員達と親睦を深めるためとかで、新入生歓迎コンパなるものが催されました。そのコンパの自己紹介の時に、自分は「四年間へこたれずに続けるつもりです。どう

そよろしくお願い致します……。」と言ったことを今でもはっきりと記憶しているからかもしれませんが自分だけは、どういう理由があっても書道部をやめまいと思っています。このような気持があるので、このようなことに気付きこういう事を書く動機になっているのかもしれません。先日幹事さん達がもう部に出て来なくなった幽霊部員に対して退部勧告か、退部通知か、何か僕にはわかりませんが、だいたい「未納金を払い部をやめるようた」というような内容の手紙を一人〳〵に宛てて出しておられるのを見て、私はなんだか寂しい気持になりました。現在クラブに出て来て活動している一年生の人数は約二十名ていどで、コンパの行なわれた五月頃は約四十名位、それもたしか五十名に近かい方だったと記憶していることから推察してみると約二十名の人が　約半年の内にやめて行ったことになるわけです。そして今さら退部していった人達が、どうしてクラブをやめたか、という理由は知るよしもありません。しかしこの人達は書道部に入る時にはたとえば「字が上手になろう」とか「勉学では得られない何かを得ようし」などと、ある考えを持ってクラブに入って来たのではないかと思われます。これに対して書道部の先輩や美術部の森本さん達から聞いた話をまとめると「練習を多くしたものが字が上手になり、また練習やその他の部活動に積極的に参加したものが勉学では得られない何かを得るのではないだろうか」というような事を言っておられます。そしてまた古くからことわざにも「初志貫徹」という有名な語句があります。現在部活動を続けている一年生は、夏季合宿、七隈祭の飾りつけ、西日本高等学校席上揮毫会などの試練？を受けて来ているので、もうこれ以上減ることはないだろうとは思いますが、もし万一やめたいというような考えが起った時は前にも書いた先輩達の言葉や、古人のことわざ等々を思い出して大学在学中四年間くらいは書道部に籍を置きたいものです。

七隈祭の反省

商学部一年　谷口　薫

第十回七隈祭は十月二十九日の前夜祭市中パレードを皮切りに一週間に渡って開かれた。一年間の学術、文化、運動の総結集であるだけに各部とも特異な催し物、研究発表を行っていた。

クラブに入って初めての大きな部活動であり、集団生活の重要さをしみじみと感じた次第である。会場作りの時など何もわからない私たちに比べテキパキと仕事をやってのける上級生を見ていると流石はと感じさせる何が何度もあった。来年からは現在とは反対の立場に立つ私たちであるが自主的にかつ集団でやらねばならぬことは幾度もあるだろう、その時は、上級生を見習い満足出来るものにしたいものだ。

とにかくこの七隈祭の為に準備して来たのだ。作品の良し悪し　配置、照明の問題など意見、感想を聞かせていただく為にも学生、一般市民の方に多数鑑賞に来てもらいたかったのだが、この祭を良いコールデンウィークとし帰省したり旅行したりする者が多いという。自分の学園祭である。私たち自身の手で私たちの学園祭を盛り上げるべきだ。もう少し七隈祭の意義、目的の再認識が必要であるとみた。

会場当番の合間にも他の部の催し物を見て回ったが、ある部の行っていたコーヒーショップとやらは、何と大学祭にしては豪華な雰囲気か　こんなものが出来るのかと感心させられた。中身のコーヒーがどんなであったかは知らぬが。

これはまた面白い珍品展、いい大人がこんな大それた嘘をつけるとはこれまた感心。嘘も方便、ユーモアがあってなかなかよろしい。

ここは又雨の中、おにぎり、焼鳥などを売っていたが、このクラスますいものでも腹の減っている時は何でもかまわんといった貪欲な人間の心理を巧みに利用した経営方法は心にくいばかりである。

何とまあたくさんの音楽が集まったことか、の

と自慢コンクールが三十一日開かれた。珍妙な身振り手振りに、口笛やテープ、何とかペーパーなど飛んだりでこの会場ばかりはあふれ出るほどの盛況。ここで歌を聞いて自分まで音痴になり寝こんだ者がいたとかいなかったとか。

とにかく二日に行なわれた文化祭も加えて一方では工レキの奏でる現代風、また片方では中国、日本の伝統、書の美を守る古典風など入り混り、見る物、聞く物、初めてなのか珍らしいのも手伝って興味深く拝見できた。

四日に入部して以来、週三回の練習をはじめ、合宿、強化練習など、この七夜祭への作品作りの準備は十分して来たつもりだが、満足できる作品が出来ただろうか、反省している次第である。

入社あと四ヶ月を前に

商学部四年　奥田勝久

荒波とか苛酷な生存競争とのごとく、一般に実社会とは容易ならざるものとされている。もし実社会とは何ぞやと問われたにせよ、今だに確答する事の出来ない頼りない自分であるが、他人に可能な事は自分に可能であるという私の信念の前には来春の実社会のスタートを不安感を抱いてする事はないのである。入社を四ヶ月に控えた今日この頃、別にこれという準備もせず、只ひたすらに最後となるかも知れぬ福岡の町をじっくり味いつつ、のんびりと学生生活を過す私自身　時としてそれで入社してうまくやれるのかと自問する事がある、すると、自分の信念の存在が準備の総てだと自信ありげな自答が得られる。しかしとはいうものの小使いかせぎのアルバイト経験しかない私自身にとって、実社会のスタートを意味する入社は全く前後左右の見当のつかめ暗やみであること

たろう。私の場合　二社内定したが、もしかすると自身の選択によるこの道は別のそれよりも多難であるかも知れぬ。しかし可能なる神といえども一秒の過去はどうする事も出来ぬ。即ち、歴史にもしという言葉は全く無意味なものである。同様に　一秒の将来といえども誰がそれを予知出来よう。人間の能力で許される事は過去にもしという言葉を用いる事も将来に絶対という言葉を用いることでもない。それは現在により良き将来を目標に最大の努力をなす事以外にないのである。もし行手この道にさしかかってそれが耐え難い程苦しかったとしても、その時点に至って許される事は再度過去に通過した岐路に戻って方向を転ずることではなく、その時点において最大の努力をなして、その苦しさを乗り切る以外にないのである、生きんが為の糧はその場より獲得せねばならない。生きんが為に必死の努力をなすことは、即ち人間最大の本能である。その場に於いて私は懸命に働く事だろう。何故ならそれが生きんが為の唯一の方法であるのだから……。

三人展に関して

吾　健　橋　石　年44部学商

既に御存知の様に　今度天神ビルで美術部の森本君と　写真部の宮原君と、僕とで三人展をやる事になった。森本、宮原両君共、我福岡大学美術部、写真部のリーダーであるばかりでなく、福岡県学生美術界、写真界のリーダーの一人で、我書道部から僕の様な者が、この三人展に参加するのは本当におこがましく思ったけれども　この件に関しては森本君から一年も前から話をもちかけられていたし、僕も学生時代の総決算というか、この三人展を一つの前進のくぎりとしたいと考えて参加する事にした。それに今年計画されただけで結局実行されなかった我福岡大学視覚芸術部門美術部、書道部、写真部、三部合同展覧会か　明年この我々の三人展が何らかの形で役に立ってよりよく成功せん事を願うと共に、我々が四年間を通じて、それぞれの部に於いて　学び得たものを検討されて、後輩諸君

が今後のますく、それぞれの道に励まれんことを願っているわけである。三人展開催にあたって、部員の皆様の御協力を得ました事を本当にうれしく思っております。紙上を借りてお礼申し上げます。

夏季合宿を省みて

法学部一年　太田勝磨

私は、夏休みに合宿があるということは、私が書道部に入部する時に、聞いていたが、合宿が始めかられる前までは、合宿が、どんなものであろうかと思っていた。私が、書道部に入部した時は家の者に私が書道部に入部したことを、何ともいっていなかったので、合宿が一週間あるとわかった時に　私自身書道部に入部していることを秘密にしたかったから、合宿のことをどういおうかと思っていた時に書道部より私の家へ、合宿の通知がきたので私の両親は、私が書道部に入部して夏休みの初めに合宿があると知ったが、私には別に合宿のことなどを詳しくきかなかった。そして、合宿が行われたわけですが、正直に申しますと、この夏季合宿は、私にとっては精神的な休養期間であったのでした。なぜかというと、六月より自動車学校に行き、練習をしていましたが、休み前に試験を受けましたが、失敗して少しノイローゼ気味になったところ、書道部の合宿があるとのことだったので、合宿に参加して、しばらく自動免許のことは忘れて合宿が終った後、又気持を新たにして受験しようと思ったからです。第一日目は、午後五時集合であったが、米のはいったカバンをさげて、自宅を午前十時に出て学校に一時頃着いたが　まだ下着や洗面道具を用意していなかったので急いで昼食をとり、天神の方へ買いにいった。買い物を終えて、帰ってきたらほかの人達は、全員きていて練習場づくりを先輩の指図のもとに行っていた。そして練習場が完全にできあがったところで、さっそく食事であったが、多くの学生が同じ釜の飯を食べるのは、中学校の修学旅行以来久しぶりのことだったので、何んだか修学旅行に

こも手っているような感じがした。これから一週間はかりこうしてみんなと食事することができることを　大変うれしく思った。しかし、ご飯の量が少なかったようだ。そして今度は、今度の合宿の計画を寮近先輩より伝達された。さて入浴、就寝と部員全部と行動を同じくしているうちに合宿が一層楽しくなって来た。その時私は、大学にはいり書道部に入部したことを大変うれしく思った。二日目の朝は　早速六時起床、六時半ラジオ体操と昨日の伝達通りに行ったわけであるが、近ごろラジオ体操などしない私は　全く爽快であった。そして朝早く起きて軽い運動をした後の食事は又かくべつにおいしかった。さて食事が済むと、しばらく休息して練習を始めるわけだが、書道部は、ペン部門と毛筆部門とに分離しているので　ペン部門の部員の人は知っていても毛筆部門の人の名前は、知らなかった。しかし、同じ書道部員であるから話の内容は一致した。私は　ペン習字については、高校時代に興味を持ってペン習字の本とか、ペン研究会の説明書などを取りよせて練習していたが、やはり書道部に入部して本格的に練習されることは、大変にうれしかった。練習内容としては、七隈祭のための作品の練習が主であったが、特に中国の古典の臨書を、練習したわけであるが、私自身としては、漢字の基礎的なことや、運編の書き方の練習をしたかった。ところでこの合宿中に、保健体育の試験があったが、合宿は福大で行われたので、通学には不自由しなかったし、又試験の要領がわかったので、大変楽に受けられたが、講義のために練習が十分にできなかった。そして、合宿における練習に慣れてくると、練習が、大変面白くなってきて練習での疲れを感じなくなった。又合宿中に、レクレーエションを取り入れてあったが、ソフトボール、卓球というように、練習とおりまぜて行われたが、いい気分転換となり大変良かった。しかし私は、運動競技が不得手であるので競技中に度々恥をかいたが、やはりこんな私でも、部員全員と共に楽しく過ごせることがうれしかった。そして合宿も終りに近づくと増々練習に味が入るようになってきた。しかし

先輩達がちらりちらりと帰られると　何だか調子が崩れた。合宿の最後の日は後かたずけであったが、合宿の終った後は、何だかさびしく感じた。後かたずけの後、合宿の反省会があったが　私も今年が初めての合宿だったので、別にこれといった意見もなかったが　今年の合宿は全体的良かったと思う。私自身としても、良いそして楽しい合宿生活であった。夏季合宿から三カ月ばかり経った十月一日から秋季合宿が又始められたが、これは夏季合宿の時のほど楽しくなかったが、幸い合宿中は良い天候であって　前期試験も終り、自動車免許証も取ったということで気楽であった。こうして二つの合宿に参加した私ですが、合宿のことは、十分にわかりましたが、前よりいくらか上達しましたが、まだ十分でありませんが二つの合宿の経験が　来年度自分で満足するような文字を書くことができるよう努力したいと思っています。そして書道部発展のために、一層頑張りたいと思っています。

近頃考える事

法学部一年　高橋幸代

人間は、何の為に生きるか？　人生の意義とは何か？、これは人間である以上少なくとも一度は考えさせられる問題である。私も近頃ふと考えさせられる事が多い。しかし正直いってまだ本当に真剣にこの問題をつきとめて考えた事はない。この年になってこんな有様では恥かしいと思うが　これが正直なところという他はない。しかし人生の意義は　重大であると信じたい。そしてこれを探究したらきっと何か得られる。結果は、いかんとも言い難いがそれでもなお人生は、絶望的なものであるか、または、更よく望みのあるものかも知れない。今の私は、こう思う。実際何の為に生きていなくてはならないのか、こんなにあくせくした何かに追われているような虚偽の自分を作っている学生生活、そして社会に出て食べる為に社会生活に同化して、社会人として結婚し、やがて

喜び　悲しみの幾歳月か過ぎ　子供の時代となり老人となり　やがて死んでいく。この循環に何の意味があろう。こんな先の見え透いた道をこれから歩んで行かなければならないなら、もう面倒臭いから、いっそう自殺でもした方がスッとするだろうと考える人間がいても不思議はない筈だ。しかしこれではあまりにも人間は惨めである。しかし、もっと何かある。私の人生は十九年しか経ってきていないのだから、自分の考えには確信がもてない。だからもっと〈多くの事を学びたい。若い人々の間では、一部では奔放な生活がなされている。新しい波だとか、何々ブームだとか若いエネルギーを発散させ享楽に浮き身をついやすのも楽しいかも知れないが、それがいつまで続くやら、遊びつかれた合間には、きっと空々しさか空虚なものが影をさすに違いない。牧水の「白鳥は　悲しからずや空の青、海の青にも染まず漂ふ」を好きだった事である。だがこの内容を知るにいたってこれにも同意しかねる。真白い鳥が汚れや、海の青そのものにも染まる事が出来ず悲しくはないだろうかなと、裏の意味は、青年が成長したが　世の中の汚れにも染まる事が出来ず苦悩している姿。それは　現実と理想の差異に悩むのであり、結局どちらともつかず、その間をさまよっている。これでは鹿らしい。どちらかに徹底した方がいい。しかし、徹底することも生やさしいものではない。結局　人間臭く生きる他はないだろう。生きるならたくましく生きたい。弱いものであってはいけない。平凡でも、小さくてもよい、精一杯自主性を持ってたくましく生きるべきだと私は思う。

書道部

先輩　原　通幸（博多女高）

実社会での生活に追われ、新たな責任と義務とを持って生活している我々卒業生が、学生時代と同様に書を続けてゆくことは大変な困難と努力を必要とします。しかしながら、福大書道部の場合二期生の野田君、三期生の安河内、西両君はこの

困難と戦いながら書をつづけておられることは見逃せません。

現役の方々の御活躍は対内・外的活動共に充実し発展をなされ卒業生の一人として誇りと喜びにたえない次第です。我々が残した小さな灯をこれまで大きな力にされたのは後輩の方々の努力にほかなりません。

想い起せば現四年の方々が一年の時我々は四年でした。そして今これらの人々が卒業を迎えようとしている。この福大書道部をになう人達が次から次と生まれて来るのです。

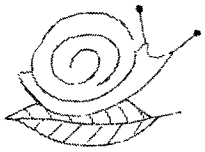
本年度の活動として、書道部門では県展入選など立派な実績を上げられました。特にペン習字部門の実力向上は特筆すべきものであります。一期責任者吉村先輩、二、三期責任者加見君の喜びはいかばかりかと察する次第です。より一層の充実を祈りたい。

今後の書道部は、次の様な事に注意をして頂きたいと思います。書道部門、ペン習字部門の相互において学生らしく福大書道部たる生活態度を再認識すること。書道部門に於いては学生書道としての書道を認識すること・西日本揮毫大会での参加校に対する大会意義の認識運動であろう。ペン習字部門に於いては、福岡学生ペン研究会との関連を明確化し、部のより一層の内容充実をはかると共にリーダーの育成を必要とする。

福岡、九州の学生書道界のリーダー的存在として着々とその成果を上げて居られる。故にその責任も重要なのであります。対外的活動もさることながら書の面に於いても学生書道の真の姿を追求すべきであると思います。

以上先輩風を吹かして申し分けないが、社会に出て第三者として見る福大書道部に気付いたことを述べてみました。ともかく老人のたわごと的な散文となり申し分けなく、一度ゆっくりと後輩の方々とのお話し合いを持ちたいものと痛感致しております。

雑談（二）



法学部1年
井上忠敏

小生四月入部以来今月迄、幹事並びに先輩諸氏に「書」、「スポーツ」に手厚く御指導、御指名を頂戴し　心から恐縮且つ感謝している者で御座居ます。何だ、今日は「忠」は馬鹿にシンミリと書いているな―「シェー」等と仰らず、まあ愚者の駄弁かもしれませんが、ちょっと耳へいや目にな）を貸して下さい。

一、上下関係……伝統・部風　年令差・物の考え方・威厳・諸々の要因があろうと思う。確かに以前よりは和やかになったと思います。親しい内にも・礼儀正しさ、先輩を敬う……全く同感です。もちろん何の気兼ねもいらず話せる人も居られます。私はいや同輩諸氏も何も横着な態度で話したり行動してはいません。もし先輩達にその様にとられた時は愚考ですが私達を「頭の弱い可哀相な奴」と許容して下さい。しかし時間が解決すると思っています。

二、左右関係・・性格、年令、出身地又30人に近い大人数になれば自然とグループ化して来るのはやむをえないかと思います。未だ表面化していないへ？）ので早いうちに何か対策をと願う次第です。しかし私は部活動において悪影響を及ぼすのではないかと断定しません。却ってその方がよい結果を生ずるかも知れませんから：。

三、硬毛関係……私にとっては余り問題はありませんが、客観的に観察しての事です。書道部の本質としても毛筆優先は仕方のない事だと一部の人は主張します。毛筆に属する私がこんな事を言うのもおかしいかと思いますが書道部員に変わりはありません。具体的例は、役員その他いろいろの行事、平常一般において自明です。この事は、複雑微妙です。気を悪くされる方もおられるでしょうから　指摘にとどまります。

以上、他にまだありますが今回はこの辺で　。小さいようで大きい事だと私は思っています。問

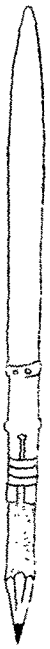
題を指摘するのみで解答できません。部員の方の模範解答を願って止みません。クラブのいい所は他の方が述べられると思いましたから私は辛みを入れてみました。しかし、私は今の部活動を楽しんでいると断言できます。

編集後記

一、二年生の積極的な投稿がなく、いつものように強制的に原稿を書かせることになりました。部を現在よりも飛躍し、成長するためには皆の協力が必要であります。そこで、皆なその気なら五号からは、積極的な原稿をお願いしたいと思います。

この機関誌四号の発行に多忙ながら御協力下さった古田教授、原光輩、四年生全員そして部員の方に編集委員を代表して感謝致します。

（江頭記）



編集委員

委員長　江頭征夫

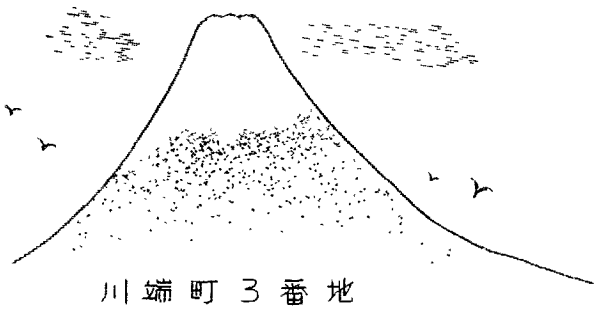
委員　二村文夫

〃　船越達也

スズラン

喫茶・軽食

福大バス停前



雲峯堂

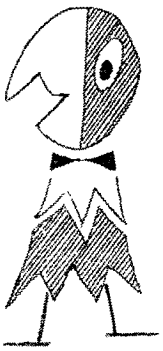
書道用具
日本画材料

川端町3番地
TEL (28) 0520
(28) 1550

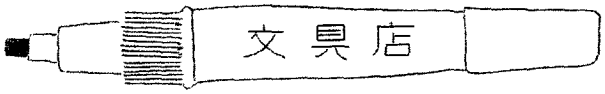
やすくて
美味し

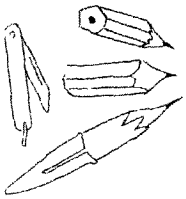
工学部食堂

福岡大学正門前



立石商店





本店　六松松3丁目
TEL (74) 5440
支店　六本松九大分校正門前
TEL (75) 5823

一品香

とてもおいしくて安い

本店	天神町64－1	TEL 74－2392
支店	渡辺通1丁目11の8	76－1752
支店	東中洲大通	28－3389
支店	東大橋545	54－4556

荒鷲　第4号

福岡大学書道部機関誌

昭和四〇年十二月十八日

編集発行　福岡大学書道部

編集委員　江頭征夫
船越達也
三村文夫

印刷所
福岡市住吉新町五七四
三洋プリント社
TEL (61) 4225